

“*Splendida bilis*” ——ウォルター・スコット、胃痛、胆汁、カロメル薬¹

石 塚 久 郎

1826年1月23日の『日誌』に「この8日間遠出できなかつたせい、よく眠れない。素晴らしきかな胆汁 (“*Splendida bilis*”)」とスコットは書き記す。² よく眠れず「不機嫌」で「胆汁症気味」(bilious)な朝を迎えるのはスコットにはありがちなことだ。体を動かすことが健康の秘訣と考えるスコットにとって運動不足は胆汁症を容易に引き起こす。³ すぐ2日前の1月20日も運動不足で「ひどく胆汁症気味 (“very bilious”）」になっていた。(J: 1826/1/20) 反対に心地よい疲労は深い眠りを誘う。(J: 1826/1/27) この当時のスコットはすこぶる具合が悪かった。昨年末からの腎臓部の疼痛(腎疝痛)に加えて、かの有名な財政破綻が1月半ばにスコットの身に降りかかったからだ。憂鬱な気分に陥るのもさもありなん。ふがいない自分に対する怒りの意味もあったのだろう。(件の引用はホラティウスの『諷刺詩』の「華麗なる怒り」(resplendent anger)をもじったものだ。)⁴ しかしなぜ胆汁なのか? スコットは胆汁的ペルソナの仮面をかぶりながら日誌をつけているように見える。男気溢れ頑強でエネルギーッシュなスコットがどうして病的なペルソナをもつのか? 本稿はこれまで論じられることのなかったスコットと胆

¹ 本稿は平成27年度専修大学研究助成(個別研究)「胃弱」の発見——メランコリーからディスベプシアへ」の研究成果の一部である。

² 『日誌』は以下を参照した。*The Journal of Sir Walter Scott 1825-1832, from the Original Manuscript at Abbotsford*, new ed. (Edinburgh, 1891); *The Journal of Sir Walter Scott*, ed. W.E.K. Anderson (Oxford: Clarendon Press, 1972). 言及するときはJの略記の後に年月日を記す。J: 1826/1/23

³ “...exercise is very necessary to me, and I have no mind to die of my arm-chair” (J: 1827/10/21).

⁴ See Anderson's note, 66.

汁（症）（bile, biliousness）との関係を彼の自伝的テキスト——『書簡』⁵と『日誌』——から考察するものである。と同時に、スコットと病という大きなテーマも視野に入れ、スコット礼賛の全盛期である 19 世紀ヴィクトリア時代において、病的スコット、胆汁的ペルソナがどうして忘却されていったのかも論じる。医学史的な観点からすれば、スコットの胆汁症の経験とカロメル薬による治療は胆汁症がファッションナブルな病となった摂政時代の得難い「症例」の一つを提示してくれる。恐らくスコットはカロメル薬を胆汁症治療に使った最初の文人の一人である。

病とスコット

健康で健全な人生を送ったかに見えるスコットも三つの大きな病気を経験し、そのいずれも彼の人生と創作活動に影響を及ぼした。一つ目は生後 18 か月の時にかかった小児麻痺の後遺症で右足に障害を持ったことであり、二つ目は 1817 年から 1819 年にかけての激しい胃痙攣、三つ目は彼の命を奪うことことになる最晩年（1830 年から）の卒中である。このうち、最初と最後の病は、スコットの正典的自伝のナラティブに首尾よく回収される。いわく、足の不自由さのため祖父の農場サンディ・スノウにあずけられたスコットは、清浄な空気と広大な自然に守られながら幼年時代を過ごした。その時、親戚の者から聞いたボーダーズ地方にまつわる伝承はその後のスコットの創作の糧となった。スコット自身の手による「回想記」（1808）のなかで述べられているように、足の不自由さもあって一人であることを好んだ少年時代は多くの古典文学に触れることになる。足の障害に加えて年少時代は病弱だったせいか意識して体を鍛え、むしろ強靭さを誇るまでになった。⁶つまり、足の

⁵ 膨大な『書簡』は Edinburgh University の The Walter Scott Digital Archive に公開されている：<http://www.walterscott.lib.ed.ac.uk/etexts/etexts/letters.html>（最終アクセス：2018 年 12 月）。この E-Text は佐藤猛郎氏の尽力によるものである。L の略記の後の数字は 12 巻本（*The Letters of Sir Walter Scott*, ed. H.J.C. Grierson et al., 12 vols [London: Constable, 1932-37]）の巻号と頁数に対応している。

⁶ 「スコット自身の手による回想」は J・G・ロックハートの『ウォルター・スコット伝』佐藤猛郎他訳（彩流社、2001 年）の第 1 章に収められている。引用は彩流社版による。英文は以下。David Hewitt (ed.), *Scott on Himself: A Selection of the Autobiographical Writings of Sir Water Scott* (Edinburgh: Scottish Academic Press,

不自由さはかえって健全な文豪スコットを作り上げたというわけだ。三つ目の死に至る卒中は、ただでさえ馬車馬のように働き執筆に励んだスコットが1826年の財政破綻に発する損失を埋めるため、それに輪をかけて働き過ぎたために生じた名誉ある代償だ、というヒロイックなナラティヴに回収される。命を削って最後まで筆を折らなかったストイックな文人スコットというわけだ。(ちなみに、この時期を扱ったロックハートによるスコット伝の16章のタイトルは「スコットランド人の意地」である。)⁷

それでは二つ目の胃痛(胃痙攣)はどうか?このエピソードも有名である。1817年の始めに激しい胃痛に襲われ2月末にはあまりの苦痛に倒れてしまう。「今年の冬はずっと胃痙攣(“*cramps in the stomach*”)に悩まされ続けました」。⁸この時は、スコットお得意の大量の瀉血に加えて温熱療法や食餌療法などで難を乗り越えたが、体が衰弱して眩暈で身動きできない、読書もままならない、耳鳴りで耳もよく聞こえない、思考もできないなど、執筆活動にも支障をきたすまでになっていた。この胃痙攣は1819年の初夏まで2年半以上、間欠的にスコットの身を襲うことになるが、その間、スコットの歴史小説の傑作のひとつ『ロブ・ロイ』の執筆出版、『ミドロージャンの心臓』や『ラママアの花嫁』の執筆出版など健筆ぶりは衰えなかった。激痛に「男らしく」(“*as a man of mould*”)耐えたとスコット自身述べているように、⁹二つ目の病は、スコットと病というナラティヴにおいては、スコットの勇敢なヒロイズムやストイズムを例証するためのバックグラウンドとしてのみ機能しているようだ。しかしそれでは、スコットの病の経験そのものや病に対する態度や関係性があまりにも単純化され、評伝のレベルでさえも正確な記述

1981), “Memoirs”. スコットの簡便かつ有益な伝記は以下。松井優子『スコット——人と文学』(勉誠出版、2007年); 年少時代について、25–33頁。より詳しい(現時点での決定版的)自伝は以下。Edgar Johnson, *Sir Walter Scott: The Great Unknown*, 2 vols (New York: Macmillan, 1970).

⁷ ロックハート、16章。「彼は男らしく(“*manfully*”)この病気と闘い、1830年の1年間に書いた原稿の量は、何とその前年の1829年に書いた原稿とほぼ同じだった。」(632頁)

⁸ L: 4-413. ロックハート、330頁。Johnson, 564-72.

⁹ ロックハート、330頁。

が望めない。¹⁰

病にストイックなスコットという像は 19 世紀を跨いで現代の批評・研究にも大きな影を落としている。例えば、レヴィはアボッツフォード邸の蔵書を調べて、医学関係の蔵書、特に医療マニュアルが当時のジェントルマンの蔵書に比べて極めて少ないことから、それはスコットの病に対するストイックな受容の証左であると結論付ける。¹¹ 極めて短絡的な結論と言わざるを得ない。¹² ストイックな文豪スコットというバイアスは結局のところ 19 世紀ヴィクトリア人が描いた質実剛健のアイコンとしてのスコット像を補強するだけである。確かに、スコット自身がこの自己イメージを積極的に構築しようとしたことは否めない。『日誌』にはストア哲学への嗜好も言明されている。¹³ しかし、読者を惑わすように幾つもの筆名を操り、匿名性の陰に隠れて執筆活動をしたスコットは「作者」も一つのキャラクターとして捉えていた節がある。¹⁴ 病と健康に関する限り、特に胃痙攣を経験した後のスコットは、以下に見るように胆汁を参照枠として病者としてのペルソナをも自己成型した。そうでなければ 1826 年に至ってもスコットが胆汁によって自己を語ることの説明がつかない。

¹⁰ スコットを病の観点から論じた評伝に以下がある。Robert Hutchison, “The Medical History of Sir Walter Scott,” *Edinburgh Medical Journal* 39 (1932): 461-85; Sir Arthur S. MacNalty, *Sir Walter Scott: The Wounded Falcon* (London: Johnson, 1969), esp. ch.13, “The Medical History of Sir Walter Scott.” いずれもほぼ時代錯誤的な評伝である。

¹¹ Lindsay Levy, “Magic, Mind Control, and the Body Electric: ‘Materia Medica’ in Sir Walter Scott’s Library at Abbotsford,” in M.J. Coyer and D.E. Shuttleton (eds.) *Scottish Medicine and Literary Culture 1726-1832* (Amsterdam: Rodopi, 2014), ch.10.

¹² スコットに医学の知識はかなりあったはずである。が、スコットと医学に関するの本格的な研究はまだない。100 年以上前に書かれた好事家による次のエッセイがあるのみだ。Arthur W. Linton, “The Pharmacy and Medicine of Sir Walter Scott,” *Journal of the American Pharmaceutical Association* 6,2 (1917): 158-64.

¹³ 例えば、“It [the Stoic school] is the only philosophy I know or can practice”. (J: 1826/11/29)。その他の言及も多々ある； (J: 1825/12/5, 12/28, 1826/5/6, 6/22 など)。しかし、他方でストア主義への躰きもある。リウマチ痛に耐えかねて、“after all I am of opinion pain is an evil let Stoics say what they will”と弱音を吐くスコットもまた存在する。(J: 1827/1/11)

¹⁴ 松井、88 頁。

胃痛とディック医師のカロメル薬

では、スコットは胆汁的ペルソナをいかに獲得したのか？その答えはいたってシンプルだ。1819年の夏にディック医師が処方したカロメル薬によってである。これを機に、スコットの胃痛の経験は痙攣系から胆汁系へ変わる。現在では当時のスコットの胃痙攣は胆石によるものではないかと言われているが、現代の医学に照らし合わせて診断するのではなく（アナクロニズム）、当時、スコットや周囲の人々がどのように当の病を理解し表現していたかが重要である。カロメル薬が使われるまでは、スコットは胃痛を間欠的な「痙攣」のタームで表現していた。折に触れてスコットは手紙に胃の激しい痛みを「痙攣」（*cramp*）、「縮攣」（*spasm*）、「発作」（*paroxysm*）などの言語で語る。¹⁵ 胃を振じるようなきつい痛みだったのだろう（“*a cruel twist*” [L: 5-47]）。例えば 1818 年 4 月 25 日の手紙には「この 12 か月というもの胃の痙攣的発作（“*spasmodic attacks*”）でとても健康がすぐれない」（L: 5-129）、と記されている。発症してから 1 年後には「慢性的」（“*chronic*”）なものになり、痛みも徐々に急激なものではなくなっていくにつれて、（L: 5-47）「痙攣、わが馴染みの敵よ」（“*my old enemy the cramp*”）（L: 5-315, 5-47）とおどけて呼ぶようにまでなる。しかし、3 週間か 1 か月に一度は激しい発作的な胃痙攣が彼を襲う。（L: 5-90）スコットの繊細な胃は天候の変わり目には「晴雨計」（“*barometer*”）のように敏感に反応する。「天気の変り目でちょっとばかりひどい痙攣（“*the cramp*”）がやってきた」（L: 5-13）「また例の痙攣（“*spasms*”）に見舞われています。でも天候が落ち着けば解放されるでしょう」（L: 5-22）スコットお得意の運動で痛みを散らそうとするが、なかなか痛みは去ってくれない。痛みの万能薬である阿片（“*laudanum*”）も彼の体に合わない。（L: 5-111）そういう時は、大量の瀉血で難を凌ぐ。大量の瀉血の後はいうまでもなくひどい衰弱が待っている。

この「地獄のような胃痙攣」（“*infernal spasms*” [L: 4-485]）の苦しみからスコットを救ったのが、ディック医師のカロメル薬である。1819 年の 6 月初頭にはカロメル薬を試したようだ。6 月 15 日の手紙にはこのことが詳しく

¹⁵ 例えば、L: 4-365, 394, 413, 418, 465, 521; 5-58, 113, 319, 333, 348, 377 など。

つづられている。

Fortunately a very intelligent man, Dr. Dick, late physician to the East India Company, has put me on a very simple regimen by which I am already so very much benefited that I doubt not by perseverance I shall recover completely. The origin of the complaint, it seems, is some derangement in the gall leading to the formation of obstructions in the biliary ducts, whence arise cramps, fits of sickness, spasms, jaundice, and all the evils that have undone me. Calomel, not used in doses—which I had already employed in vain but in such very small quantities and so constantly as to maintain the effect of the mineral on the constitution, but not to bring on salivation—is, Lord love its heart, an absolute specific. Ten days' rigid attention to his directions have restored me to action and to appetite and to healthy digestion. (L: 5-395)

(抄訳：幸運なことにかつて東インド会社にいたディック医師の非常にシンプルな養生法によって完全な回復が見込まれる。この病の元凶は胆汁の不調による胆管のつまりにあるようだ。そこから痙攣や発作、縮攣や黄疸などあらゆる悪さが生じたのだ。彼の処方するカロメル薬はごく少量をコンスタントに服用することで、このうえない特効薬となった。10日間彼の処方に従ったおかげで食欲も増し消化活動も正常にもどった。)

7月28日の手紙には「この2か月間」カロメル薬を服用したとあるので、少なくとも6月から7月の間（そして8月の途中まで¹⁶）カロメル薬治療を続けていたことになる。その効果はてきめんでスコットが「特効薬」と称するのも肯ける。あまりの効き目に感激したのだろう、スコットはその後も折に

¹⁶ ディック医師からスコットへの手紙参照。 *Familiar Letters of Sir Walter Scott* (Edinburgh, 1894), vol.2, 53-55.

触れてカロメル薬による健康の回復を手紙にしたためている。¹⁷

激痛を伴う胃痙攣そのものはこのカロメル薬治療によって治癒されたのだが、胆汁の病（胆汁症の発作）は慢性化し、その後も時折スコットの身体を訪れる。1825年4月16日の手紙には「ここ最近はめったに訪れなかった訪問者、私の馴染みの友である胆汁の病（“my old friend the bile”）がやってきた」（L: 9-34）とある。ここで重要なのは、カロメル薬以前は胃痙攣という胃痛の症状によってのみ病の経験が語られたのが、ここにきてその元凶が判明することにより、痙攣が副次的なものに格下げされ、原因たる「胆汁」（gall, bile）によって自己の病が語られるようになったことだ。「私の病は胆汁の不調（“some derangement of the bile”）によるもので、それにともなって胃のとてつもなく激しい痙攣が起きたのだ。」（L: 5-493）つまり、スコットは「胆汁器官の不具合を完全に修正する」（“correct all inaccuracies of biliary organ” [L: 5-429]）カロメル薬を服用することで胃痛を痙攣ではなく胆汁の病として新たに読みかえていることになる。¹⁸ 以下に見るように、胆汁的自己成型——胆汁によって自分の病を読みかえる行為——は後年のスコットにおいて顕著である。しかしその前に、ディック医師とそのカロメル薬について述べなければならない。一体ディック医師とは何者なのか？カロメル薬とはいかなるものなのか？

スコット研究をいくら眺めても、管見の及ぶ限りこのディック医師についてはほとんどなにも述べられていない。エドガー・ジョンソンの詳細なスコット伝でさえ、索引にはファーストネームすら記されていない。かろうじてコーソンの書簡への注釈に簡単なバイオが載っているのみである。¹⁹ スコットが最大限の賛辞を送り、病者スコットの転換点ともなるきっかけをつくったというのにこれは不自然だ。スコットが医者と薬の世話になり回復したことが、

¹⁷ 例えばワーズワス宛の手紙参照（L: 5-491-93）。

¹⁸ ちなみに、スコット自身は意識してはいなかっただろうが、「痙攣」の用語群は当時の正統な医学（例えばウィリアム・カレンのそれ）にあつては神経の病に分類できる。固体説の神経系の病から体液説の胆汁の病への変遷はこの時期に特有のものである。スコットの読みかえはこれをなぞっているとみえる。

¹⁹ James C. Corson, *Notes and Index to Sir Herbert Grierson's Edition of The Letters of Sir Walter Scott* (Oxford: Clarendon Press, 1979), 432.

ストイックなスコット像に相反するともいうかのように黙殺されている。確かに情報は限られている。が、先の引用で「東インド会社」の医師だったという点は極めて重要である。カロメル薬とは塩化水銀 (mercurous chloride) の旧称で、いわゆる水銀療法的一种として、軟化剤 (aperient)、緩下剤 (通じ薬) (laxative)、瀉下剤 (purgative) として当時広く流布していたものなのだが、同様の機能をもつ青汞丸薬 (blue pill) と共に、植民地であるインドから、現地で医療に携わっていた医者たちによって 18 世紀後半に本国イギリスにもたらされたものである。²⁰ 当然ながら東インド会社の医者らが大きくかかわっており、ディック医師もその一人と目される。水銀療法はイギリスでも梅毒の治療法として確立されていたが、その副作用の方が体に悪影響を及ぼす(最後は狂気に至る) ことから非常に危険な劇薬とされてきた。²¹ カロメル薬や青汞丸薬は水銀の割合を少なくすることで危険な副作用を軽減し比較的安全に使用できるものとして重宝された。医学史家のマーク・ハリソンによれば、18 世紀の半ばごろから東インド会社はカロメル薬を肝臓の炎症の治療として使いだしたらしい。肝臓と胆汁に由来するもろもろの疾病と症状(特に胆汁性の熱病)は温暖な気候のイギリスから熱帯気候のインドへやってきたイギリス人の身体を蝕む恐ろしい病であり、それに対処するために、カロメル薬を用いたマイルドな水銀療法が開発された。「開発」といったが、実はこの療法はインドの伝統的医療において用いられていたもので、イギリス人はそれを借用したに過ぎなかったのだが。²² 植民地(周縁)で実験され、その効果が試され報告され、本国(中心)へ逆輸入され、爆発的な流行をみるというダイナミズムをカロメル薬は体現したのだ。

²⁰ 詳しくは Mark Harrison, *Medicine in an Age of Commerce and Empire: Britain and its Tropical Colonies, 1660-1830* (Oxford: Oxford University Press, 2010) 参照。特に 146-57。

²¹ 水銀療法については以下を見よ。Andrew Cunningham, “Mercury: ‘One of the Most Valuable Drugs We Have’ (1937),” in Ole Peter Grell, Andrew Cunningham and John Arrizabalaga (eds.), *“It All Depends on the Dose”: Poison and Medicines in European History* (London: Routledge, 2018), ch.10. 先の引用でスコットが水銀を旧来の方法で用いたため、その副作用として唾液分泌過多 (salivation) に陥ったことが記されている。まさに劇薬である。

²² Harrison, 146-47.

スコットがディック医師をカロメル薬（水銀）を少量で長く使う療法の発見者と言祝ぐ（L: 5-472）のは、誇張といえれば誇張なのだが、全くの的外れというわけでもない。ウィリアム・ディック医師（Dr. William Dick）はベンガルの東インド会社で 1780 年代半ばから医療行為に携わり、²³ カロメル薬をはじめとする水銀療法を肝臓の病に実験的に適用した先駆的医師の一人である。残念ながらディック医師による著作はなく、確認できるのは 1785 年に『メディカル・コメンタリーズ』に寄稿した東インドの軍隊における水腫症に関する論文のみである。²⁴ ディック医師はこのなかで水腫症だけでなく、肝臓の病における水銀療法についても言及している。²⁵ しかし、実験途上であったのだろう、水銀療法については効果は確認しているがまだ報告するには十分な経験を積んでいないと弁明している。当時の植民地の医師らは本国と書簡のやりとりで情報公開・交換を行っていたが、ディック医師も本国の肝臓病の権威の一人であるウィリアム・ソーндグーズ医師と手紙のやり取りをおこなっていた。ソーндグーズ医師の著名な『肝臓論』の第 2 版（1795）の注に、ディック医師からの手紙が紹介されている。²⁶ その中で、この時までには十分な経験を積んだのだろう、過去 7 年間で肝臓の病（黄疸）にカロメル薬を使用し抜群の効果があつた旨が報告されている。本国に帰国してからは東インド会社（本社）の主治医の地位についていたようだ。リチャード・リースの『熱帯気候への医療ガイド』（1814）は熱帯医療の知識と経験豊富なディック医師を称えるため、その名誉な地位にある彼に捧げられている。²⁷ その序文には、東インドの医療行為が近年、本国にも根付いたこと、特に肝臓・胆汁病に対する水銀療法がソーндグーズ医師やカーリー医師によって広められたのはいいが、万能薬に間違われ誤った使用法がはびこり、

²³ See *Military History of Perthshire, 1660-1902* (R.A. and J. Hay, 1908), 496. 恐らく 1784 年にインドへ向かった。

²⁴ William Dick, “Observations on Dropsies Prevailing among the Troops in the East Indies,” in *Medical Commentaries, for the Year 1785*, vol.10 (London, 1786), 207-33.

²⁵ *Ibid.*, 214-15. (この時は砲兵隊の外科医という立場である。)

²⁶ William Saunders, *A Treatise on the Structure, Economy, and Diseases of the Liver*, 2nd ed. (London, 1795), 195-96.

²⁷ Richard Reece, *Medical Guide for Tropical Climates* (London, 1814).

それが経験豊かなディック医師によって正された旨が記されている。²⁸ 青朮丸薬やカロメル薬を流行の域まで高めたハミルトン医師やアバネシー医師といった著名人に比べれば知名度は低いものの、上記の説明や『ロンドン・マガジン』に掲載された「医療におけるファッション」という戯れ文にカロメル薬とともにディック医師の名がパロディとして登場することも考え合わせると、²⁹ ディック医師はこの分野ではそれなりに名が知られていた人物ということになる。³⁰ (スコットも彼が「胆汁の病の有識者」(L: 5-409)であることを認識している。)

カロメル薬の勧め、水銀の神格化

話をスコットに戻そう。スコットはディック医師をスコット家の主治医の一人であるエベニザー・クラークソン医師を通じて紹介されたと思われる。ディック医師からの手紙には、友人のクラークソン医師が彼の代わりにカロメル薬を処方したり、スコットの病状の回復状況を鑑みて処方の中断を進言したりしていることが記されているからだ。³¹ このとき、クラークソン医師からの中断の助言にたいしてスコットは、中休みが必要というならやめてもよいが、それは再開したときのカロメル薬のより一層の効果を期待してのことである、と言っている。(L: 6-91-92) それほど、スコットのカロメル薬に対する期待と熱意は強い。胃痙攣が治癒したからといってスコットはカロメル薬を手放さない。むしろ、一番信頼できる、しかも自分の体に合った常備薬として以後も使用し続けている。(この意味においてスコットの胆汁質の身体(“my bilious habits” [L: 10-307])の発見と胆汁的自己の成型とは平行である。)同じ胆汁の病であるファーガソン夫人にカロメル薬の効用と副作用を知らせる手紙を1823年に書いているが(L: 7-326)、この時、この2年間の経験からと言っていることからスコットが断続的にカロメル薬を服用し

²⁸ Ibid., xvii-xviii.

²⁹ “On Fashion in Physic,” *London Magazine*, new series #10 (Oct., 1825): 177-91.

³⁰ ディック医師は1821年1月16日に亡くなっている。*The Edinburgh Magazine and Literary Miscellany* (February 1821), 191.

³¹ *Familiar Letters*, 53. この手紙はスコットがディック医師に向けて書いた8月6日付の手紙への返信である。

ていたことが分かる。『日誌』に見る限り、1826年まではカロメル薬を服用（ないしは常用）していたのではないと思われる。自分の体にこれほどフィットする薬を手放すことなどスコットには考えられないのだ。³²

カロメル薬をはじめとする水銀療法は摂政時代に熱狂的な流行を見るのだが、³³ スコットの熱烈なカロメル薬賛美も負けてはいない。何度かカロメル薬を「水銀の神」と称え神格化し（“*God Mercury descended in the shape of calomel*” [L: 5-421]）、³⁴ 自分を「水銀の神の心酔者」（“*the votary of God Mercury*” [L: 6-48]）とさえ称する。カロメル薬の信望者となったスコットはこの特効薬を身内のものにも熱心に勧める。義理の息子のロックハートに君が「胆汁症（bile）」で苦しい思いをしているならカロメル薬を飲むべきだ、すぐに効くからと進言している。この時、自分の経験から煙草は胆汁を過剰なまでに分泌させることを知っていたのだろう、ロックハートに煙草を減らせと忘れず助言している。（L: 6-374）胆汁の人ならではのアドバイスである。もちろん、直近の身内には断固としてこの特効薬を勧める。現代的意味でヒポコンドリイ気味の娘ソフィアは、³⁵ 胆汁の症状を何度か呈するが、はじめのうちはスコットの言うことを聞かずカロメル薬に手を出さない。1821年の3月に胃痙攣（スコットと同じ症状という前提なので痙攣という言葉を使っているが、元凶は胆汁である）の発作を抑えるためようやくカロメル薬に手をのばしたという知らせを聞いてスコットは自分のことのように喜んで

³² “[I]t seems to agree remarkably well with my constitution.” (L: 6-92)

³³ この薬の流行と「胆汁症」自体のマニャクな流行、それがいかなる経緯によって生じたかなどの胆汁（症）にまつわる詳細は別のところで論じた。Hisao Ishizuka, “From Hypo to Bile: The Rise and Progress of Bilioussness in the Long Eighteenth Century,” in Clark Lawlor (ed.), *Literature and Medicine: The Eighteenth Century* (Cambridge: Cambridge University Press, *forthcoming*). 以下の拙論（カーライルと胆汁・胃弱の論考）にも胆汁症の熱狂が触れられている。Hisao Ishizuka, “Carlyle’s Nervous Dyspepsia: Nervousness, Indigestion and the Experience of Modernity in Nineteenth-Century Britain,” in Laura Salisbury and Andrew Shail (eds.), *Neurology and Modernity: A Cultural History of Nervous Systems, 1800-1950* (Basingstoke: Palgrave, 2010).

³⁴ L: 5-431 (“a Deity descended to my aid...the potent Mercury himself in the shape of calomel”.)

³⁵ See Levy, 217.

いる。(L: 6-377)³⁶ 更に、ソフィアの回復の知らせを聞き、カロメル薬に新たな誓いを立てさせる。(L: 6-387) 1824年2月にソフィアに再発した胃瘻も同様にカロメル特効薬で退治する。(L: 8-174) 妻のシャーロットも同様。1825年10月シャーロットが発作に見舞われ(頭に血が上がったようだ)瀉血をしたが、この原因は胆汁にあったので、「カロメル薬によっていつも通りに回復した」。(L: 9-234) 「いつも通りに」とあることから妻の体調不良にカロメル薬をスコット自身が処方していたことが分かる。二女のアンや長男のウォルターもまた例外ではない。³⁷ カロメル薬はスコット家になくはならない常備薬となったのである。

ファッショナブルな胆汁、胆汁の自己成型

ディック医師が笑いの種にされていた「医療におけるファッション」は正確なクロノロジーは犠牲になっているものの、当時の医療の流行り廃りをうまく言い当てている。「神経と同じく胃も天下を取った。が、それもつかの間、突如、解き放たれたベンガルがもろとも襲いかかる。黄色いネイボップの大群がカレーとカロメル薬で身を焦がしてやってきては胃を木っ端みじんにするのだ。肝臓とディック医師のお出ました。」³⁸ 18世紀はあらゆる疾病が神経に帰された「神経の病」の時代であり、神経を語ること、神経の病にかかることがファッションと化した世紀であった。³⁹ 19世紀への世紀の変わり目に胃の病(胃弱 [dyspepsia])の流行の兆しが見えたのだが、この戯れ文によれば、それもインドからの刺客によって廃れる運命にある。今、流行の病は肝臓と胆汁なのだ。「肝臓が今やファッションとなった。肝臓病、胆汁症 (bilious)、胆汁の病 (bile) が流行り言葉となっている。」⁴⁰ 実際は、胃弱の本格的流行はこの後であり、逆に胆汁は日常化して胃弱の陰に隠れることに

³⁶ ソフィアへの手紙も参照、L: 6-379。

³⁷ L: 11-47 (“she [Annel] has been dealing with Calomel greatly too long.”)

³⁸ “On Fashion in Physic,” 179.

³⁹ これに関しては多数の文献があるが、なかでも次の文献が重要。G.S. Rousseau, *Nervous Acts: Essays on Literature, Culture and Sensibility* (Basingstoke: Palgrave, 2004). 「神経の世紀」への修正として以下がある。Hisao Ishizuka, *Fiber, Medicine, and Culture in the British Enlightenment* (New York: Palgrave, 2016).

⁴⁰ “On Fashion in Physic,” 179.

なるので、細かい点では誤認があるものの、この後アバネシーを登場させるなど実を的を射る諷刺となっている。19世紀の最初の四半世紀に胆汁が神経に代わって流行の真ただ中にあることを証言するのはこれだけではない。例えば、スコットの蔵書の一つに数えられるキッチナー博士の『長寿術』は神経と胆汁を病んだ洗練された病弱者向けに書かれたものだが、胆汁の病がいかにも巷で流行っているかを伝えてくれる。「胆汁の病や肝臓の病は、どんな腹の不調を感じた時でも使われる今はやりの言葉である。それは胆汁が欠如しているか過剰になるかで生じるのだ」。⁴¹ そう、一言でいえば摂政時代に胆汁はファッションと化したのだ。

ここで注意したいのは、胆汁症（胆汁の病）とは、単なる肝臓病でもなければ消化不良でもないということだ。それならば、以前から馴染みの疾病であって、なにも今になって騒ぐ必要もない。胆汁症とは、17世紀から18世紀にかけての一連のファッションナブルな病——憂鬱病（spleen）、ヒステリー症（hysteria）、ヒポコンドリア（hypochondria）、神経の病（nervous diseases）、ジョージ・チェイニーの「イギリスの病」（English Malady）など——の系譜に連なる、消化不全を土台としながらも様々な心身の慢性疾患を伴う症候群である。18世紀にはこの症候群の参照点が神経に求められ、摂政時代には胆汁に求められるようになった。その意味で胆汁の病は18世紀のヒポコンドリアの変種といえるのだ。⁴² スコットが『ウェイヴァリー』をはじめとする歴史小説を爆発的に流行させていたその時期に、胆汁も一世を風靡していたことになる。

スコットはこの流行（fashion）に歩を合わせるように胆汁による自己成型

⁴¹ William Kitchiner, *The Art of Invigorating and Prolonging Life*, 2nd ed. (London, 1821), 239. ちなみにキッチナー博士はスコットの『アイヴァンホー』の舞台化にも参加している；Samuel Beasley, *Scott's Ivanhoe* (London, 1820), the music selected by Dr. Kitchener とある。

⁴² ヒポコンドリアから胆汁の病への変遷については拙論で詳しく述べたのでそちらを参照されたい；Ishizuka, “From Hypo to Bile.” ジョージア朝における胆汁症の流行については以下の論考も参照。Jonathan Andrews and James Kennaway, “Experiencing, Exploiting, and Evacuating Bile: Framing Fashionable Bilioussness from the Sufferer’s Perspective,” *Literature and Medicine* 35 (2017): 292-333. 但し彼らの主張には同意できない部分が多い。先の拙論（“From Hypo to Bile”）はその反論でもある。

(self-fashioning) を行う。ここで重要なのはスコットの胆汁的自己成型は医学的知識からではなく、あくまでもカロメル薬による自身の身体的経験からくるものだという点だ。胆汁(症)に関する知識はあったはずである。例えば、1807年4月27日の母親への手紙に「この歳でまだ胆汁症のタの字も知らない」(L: 12-115)と豪語しているし、1806年7月の手紙で友人のジョージ・エリスが「肝臓の病にひどく苦しんでいる」(“a martyr to the liver” [L: 1-308]) ことを、1818年11月の手紙では、軍医のスコット医師が「肝臓の病」(“the liver complaint” [L: 5-228]) で苦しんでおり、胆汁症患者が集うバースの鉱水を試した旨も語られている。⁴³ つまり、語ろうと思えば胆汁の用語を使っていくらでも語ることはできたはずなのだ。更に言えば、胆汁症の症状とおぼしき具合の悪さも経験していたはずである。1810年8月のジェイムズ・バレンタイン宛の手紙の中でスコットは、バレンタインのヒポコンドリアックな胃弱(消化不良)を気遣っておよそ次のような主旨のことを書いている。「君のように強靱な体格と旺盛な胃をもっているものにとって座業の怠惰な暮らしは胃を弱くするだけだ。そこからいろんな悪さが起きる。鼓腸性のヒポコンドリアは最悪だが、消化不良からくる不快感もばかにならない。」(L: 2-365)「青い悪魔」とよばれる憂鬱な気分も同じく消化不良からくるとスコットは続けて、これを知っているのは自分自身の経験からだと述べている。(L: 2-366)⁴⁴ また、ディック医師に当たった二つ目の手紙には、感謝の意と共に、「私の病が重症化する何年も前から苦痛の種だった鼓腸の病(“flatulent complaints”）」(L: 6-128) さえ解消したと述べられている。「鼓腸」や消化不良に伴うヒポコンドリアや憂鬱は胆汁症でもお馴染みの症状だ。まだ健康に自信のあった頃のスコットは些細な胃腸の悪さをわざわざ言語化する必要性も感じていなかったのだろう。当時の『書簡』には鼓腸の痛みさえほとんど前面にでてこない。⁴⁵ ところが、ディック医師のカロメル薬体験

⁴³ 以下も見よ。L: 7-447, 453 (スコットの兄のジョン・スコット少佐が胆汁症で苦しんでいる)。

⁴⁴ Cf. L: 3-418, “It is wonderful how stomach complaints assume forms capable of deceiving the best medical men.” 胃弱がヒステリーのように変幻自在な病であることをよく理解している。

⁴⁵ 1816年の手紙に「生涯ではじめて医者の手にかかった。……胃の愚かな炎症」とあ

を契機に胃腸不良を中心とする心身の不具合を胆汁（症）というテンプレートを通して認識し言語化するようになるのだ。

スコットの胆汁による自己成型の顕著な例は、胆汁による後年の病の読みかえ行為に見られる。1825年12月末からの腎疝痛——「腎臓の炎症」(L: 9-347) ——に発する疾病を見てみよう。当初、「尿砂」の疑いがあるらしく（“a gravellous tendency” [L: 9-347]）、スコットは面白半分に1824年にマカダム氏によって開発された碎石を敷き詰めてできた道路、マカダム道路にちなんでこれを「マカダム化現象」（“Macadamization”）と呼んだ。この時、「胆汁が加担して襲った尿砂症」（“a gravellous attack in alliance with bile” [L: 9-349]）と診断したのは彼の主治医クラークソン医師である。（1825年12月26日の手紙）。⁴⁶しかし、悪さをしたのは「胆汁」だとスコットは思ったのだろう、その翌日から得意のカロメル薬を服用する。⁴⁷カロメル薬が効いたかのように、翌年の1月には「尿砂の気のあるかなり激しい胆汁の発作に見舞われました」（“I have had very tight attacks of bile with a gravellous tendency” [L: 9-364]）とクラークソン医師の診断をみずから軌道修正する。スコットにとって胆汁こそが主なる要因であり尿砂は二次的な症状でしかない。スコットは医師の尿砂症という診断を胆汁症という自分の経験に基づく診断で読みかえるのである。

最晩年の脳卒中においても似たような事態が見られる。1830年2月15日に卒中に襲われ話す機能を奪われる。瀉血と食餌療法で何とか危機を脱するが、これが終わりの始まりとなった。この時、患者（スコット）と医師との暗黙の了解のもと、卒中の原因は胃に帰された。卒中とその後の幾度かの眩暈やふらつきは全て胃からきていると医者から言われた、自分もそう思うとスコットは手紙と日誌に書き記す。「私は本当にこの無様な症状が胃からきていると信じている」。(L: 11-298)⁴⁸胃の調子の悪さからきているとすれば食餌療法などの養生でなんとかコントロールでき、希望ももてるのだ。⁴⁹ ロッ

る。(L: 12-359)

⁴⁶ J: 1825/12/26 も参照 (“gravel augmented by bile”).

⁴⁷ L: 9-351 も見よ。

⁴⁸ J: 1830/5/26, L: 11-297~299 も見よ。

⁴⁹ Cf. L: 8-257, “Your Lordships complaints proceed I think from the stomach & are

クハートによれば家族のものはそんな望みはとうに捨てていたというが、⁵⁰ 当人と医者だけは阿吽の呼吸で結託していたことになる。

注意しなければならないのは、今から見れば卒中が胃からきているという考えは全く説得力をもたないように見えるのだが、当時の人々にとっては、かなり説得力をもった医学的見解だったということだ。そうでなければわざわざ医者たちもそろってスコットの意向に沿うようなことは言わなかっただろう。今ならさしずめ、胃癌を胃潰瘍だとかまかすようなものだが、いや、それ以上の説得力をもっていた。というのも、胆汁症のテンプレートが人口に膾炙し胆汁万因論が跋扈してたからだ。摂政時代、アバネシー医師の「本」

(the Book) のヒットによりあらゆる疾病が消化器系の不調に帰された。アバネシーによれば胆汁が消化活動に必要な不可欠な体液となるので、胆汁の調整があらゆる疾患の治療の鍵となる。⁵¹ こうした胆汁説にあっては、一般的に言われる胃や肝臓、腸といった個々の器官は消化器系全体のことを暗示しているといつてよい。スコットにとっては持病の胃痛があったため、肝臓ではなく胃と表現したものと思われる。スコットが卒中や眩暈を胃に帰したとき彼の頭の中にこのアバネシーの胆汁説があったのは確かだ。というのも、1830年4月1日の手紙に「それ[眩暈の症状]はアバネシー医師が言うようにすべて胃からくるのだと思う」(L: 11-317) と記しているからだ。⁵² 同年12月に再び卒中の発作が起きる。それでもまだ医者たちも「悪さは胃からだ」と言い張る。(J: 1830/12/20; 1831/1/27) 彼らはスコットの胆汁の自己成型を巧みに利用したと言えるのかもしれない。

スコットが胆汁説を信じ自己成型に活用したのは、他の例からもわかる。例えば、晩年、眼鏡をかけて仕事しなければならなくなるほど目が衰え、時に目がかすんで字が躍るなど目の不調を訴えることがあったが、スコットは

peculiarly within the reach of medicine.”

⁵⁰ ロックハート、638頁。

⁵¹ アバネシーの「本」の流行と胆汁説については拙論を参照。Ishizuka, “From Hypo to Bile.”

⁵² Corsonの注釈ではこのAbernethyへの言及はDr. Abercrombieであるべきだとしているが(306)、全くの誤りである。Abernethyの胆汁説の流布の大きさ、Abernethyの抜群の知名度から見てもここはAbernethyで間違いない。

それが「胃からくるものに違いない」と考える。(J: 1826/4/2) また、1823年10月から1824年5月にかけての息子ウォルターの呼吸器系の不調(ひどい咳)を肺ではなく、執拗なまでに胃に帰しているのも同様だ。長男の健康を気遣いながらスコットは自分の意見をきっぱりと唱える。「私の意見はこうだ。その咳は胃からくるのだが、おまえがそれを蔑ろにしたせいで肺にきたのかもしれない」。(L: 11-30) スコットは息子をというより自分を安心させるかのように、息子の咳が肺の病ではないことを繰り返す。「わが家系には肺病の気質はこれっぽっちもないのだから」(L: 11-30) お前のしつこい咳は胃に起因する、「自信をもつというが、それは肺とは何の関係もない」(L: 11-32) のだと。卒中を胃に帰したように、息子の咳を胃に帰しているのは、当時、肺病(結核)が死に至る病であったからだ。しかしここでも、なぜ肺病の徴候を胃に帰すことが説得力をもつのか? 答えはもうお分かりだろうが、アバネシーらの胆汁説にある。ここでは詳しく述べられないが、胆汁による頭痛(bilious headache)が18世紀末から胆汁症の流行とともに慢性的な病となったのと同様、胆汁や肝臓からくる肺病説がまかり通っていた。医学的には「肝臓の咳」(liver-cough)や「胃弱性の肺病」(dyspeptic phthisis)などといった用語が使われたが、⁵³ 胃と肝臓はその驚異的な共感力で体のどの部位にも病をもたらすものとされたのだ。

ここでもう一つ注目すべきなのは、スコットが家系(遺伝)を気にしているということだ。スコット家には肺病のものはいないし、その気もない(“no connection to any hereditary taint” [L: 11-35])。ゆえに、息子の病気は胃や胆汁と関連があるはずだ。⁵⁴ 娘のソフィアもスコットと同じ胃痙攣を経験しカロメル薬で治癒したではないか。そういえば、兄のジョン・スコット少佐も胆汁の病を長らく患っていた。⁵⁵ そう、ここでスコットはどうやら、スコット本人に発する胆汁や胃弱という病の新しい家系を創造しているようなのだ。

⁵³ 例えば以下を見よ。John Abernethy, *Surgical Observations* (London, 1809), 15-16, 58 (on troublesome coughs from the stomach); G.D. Yeats, *A Statement of the Early Symptoms Which Lead to the Disease Termed Water in the Brain* (London, 1815), 91 (on liver-cough); A.P.W. Philip, *A Treatise on Indigestion*, 4th ed. (London, 1825), 316, 344-49 (on dyspeptic phthisis).

⁵⁴ ある時スコットは長男の病を胆汁症といっている (L: 9-347)。

⁵⁵ L: 7-447, 453, 456.

胆汁の自己成型以前は胃痛・胃痙攣を痛風のようなものとしてとらえていた節がある。1817年の手紙には「胃に陣取っていた痙攣が医者スキルによって、同類の病である痛風のように、手足を襲い、指に居ついた」ため、ペンを持ってなくなったと言っている。(L: 4-521) 胃痛を痛風と同類と捉えるのは18世紀までの医学では珍しくない。しかし、上に見たように1819年夏のカロメル葉の服用で、胃痛・痛風説は胆汁説へと変化する。ファッションブルな病とされた肺結核の家系でも贅沢病の権化とされた貴族の病たる痛風の家系でもない、19世紀ヴィクトリア時代に中流階級の慢性病の最たるものとなる胃弱と胆汁症⁵⁶をスコット家は、ヴィクトリア時代に先駆けて家系の病として取り入れているように見える。スコットは病の家系をも胆汁的自己成型によって創造するのである。

胆汁と日常と憂鬱と

スコットの胆汁症は、当時の胆汁症のテンプレートをなぞるように、日常の細々とした生活習慣の変化や過誤から生じる。食習慣の変化や過誤にはじまり、⁵⁷ 過労、遅くまでの活動、運動の欠如など身体的生活習慣の変動と過誤、⁵⁸ 天候の変化や温か過ぎる室内環境など外的な環境が身体に与える影響、⁵⁹ 精神的な不安や悪い知らせ、極端な怠惰など精神・道徳的なもの⁶⁰までその要因は多岐にわたる。例えば、1826年2月16日、「眠れず胆汁症気味」なスコットは、昨晚、今年になってはじめて煙草をやったと注記していることから、原因を食習慣の変化に帰している。(J: 1826/2/16) 不眠と胆汁症気味の朝はスコットにありがちな光景だ。⁶¹ 1826年6月8日には犬が一晩

⁵⁶ See Ishizuka, “Carlyle’s Nervous Dyspepsia.”

⁵⁷ J: 1828/1/8; L: 9-82.

⁵⁸ J: 1827/10/9 (“...my stomach was extremely disordered—with bile I suppose from unwonted late hours and change of living”); J: 1827/4/25 (“Snow...it prevents my walking, and I grow bilious”).

⁵⁹ J: 1825/12/14. Cf. L: 6-215, “Mama [Scott’s wife] has had a severe bilious attack in consequence of the excessive hot weather”.

⁶⁰ J: 1825/12/22 (“it arose from mere anxiety”); L: 10-46. L: 12-132 (悪い知らせで胆汁気味)。J: 1826/7/13 (妻の死で胆汁の発作)。

⁶¹ J: 1826/1/20, 2/8, 2/16, 5/24, 6/8, 7/7, 1831/10/31. 不眠で不機嫌で胆汁症的なのは、さながら胃弱の賢人カーライルを彷彿させる。

中吠えたので眠れなかった。「胆汁症と頭痛で朝を迎えた」とある。(J: 1826/6/8) 不眠と目覚めの悪さが胆汁症と結びつくせいだろうか、スコットは「眠気」(drowsiness)、ひいては怠惰を胆汁(症)と結びつける。勤勉家のスコットにとって仕事中にふと訪れる眠気は大敵だが、『日誌』にはよくこの敵が胆汁と共に登場する。「胆汁にやられた。胆汁のせいでひどく眠い。頭をはっきりとさせないといけない時なのに。」(J: 1829/1/31)⁶² 精励恪勤をむねとするスコットにとって胆汁(症)は日々の義務の遂行の妨げ、日常の習慣の躓きとなるのだ。(但し、「素晴らしきかな、胆汁」と嗤っているように、一方的な躓きではないし、スコット自身、習慣(custom)の虜になることを拒否している。)⁶³

身体的な症状に加え精神的な不調——鬱的なものから不機嫌さなどの気分的なものまで幅広い——も胆汁症の特徴的症狀だ。これは胆汁症がメランコリーやヒポコンドリアなど憂鬱系の病の末裔であることを考えれば当然のことと言える。特に、内省的なジャンルである『日誌』においてその傾向が強くなっている。実際、『日誌』というジャンルが鬱を悪循環的に誘発することをスコット自身も意識していた。1829年7月から約一年もの間日記を中断したことがあったが、再開したときに真っ先に語られた中断の理由は、まさに鬱蒼とする気分を記録することが鬱を誘発するからというものであった。

(J: 1830/5/23) (ジャンルの要素のほかに、1826年1月の財政破綻と5月の妻シャーロットの死といった不幸な出来事、更に老いへの意識もスコットの憂鬱の元となっている。) スコットの鬱的な気分は「心気症」、「意気消沈」(“low spirits” [J: 1827/10/24])、「青い悪魔」(“Blue Devils” [J: 1827/5/12]) や「文人の病」(“the morbus eruditorum” [J: 1825/12/11]) といった伝統的な隠喩で語られることもあれば、時に「黒い犬」(“the black dog” [J: 1826/5/11])⁶⁴ や「気塞ぎ」(“mulligrubs” [J: 1826/3/14])⁶⁵ といった一種独特な表現で表される場合もある。そのすべてが胆汁(症)と直接結びつけら

⁶² Cf. J: 1827/2/27.

⁶³ J: 1825/11/22, 1827/2/28.

⁶⁴ J: 1827/6/6, 1827/7/5, 9/24, 1828/3/28.

⁶⁵ J: 1827/9/19. この表現は腹痛も含んだ不機嫌さを表しているので、旧来のヒポコンドリアと等価である。

れているわけではないが、時に胆汁が意識して述べられる。例えば 1827 年 7 月 5 日にはバランタインに『キャノンゲイト年代記』への序文を送ることができたのに、なぜか気分は落ち込んで、日記にこう書く。「でも幸せではない——黒い犬が私を蝕む——胆汁（症）（“bile”）だろう」。(J: 1827/7/5) そのすぐ後に「精神の惨めな病」(“wretched Malady of the mind”) と記しているので胆汁（症）が単に身体的な（特に消化器系の）不調からくるのではなく、精神的な不調とシンクロしていることが分かる。⁶⁶

スコットの鬱的気分は更に、胆汁症を治癒すべきカロメル葉の副作用としてもたらされる。1825 年末からの尿砂を伴う胆汁症にカロメル葉を服用するが、その副作用で気分が落ち込み不快感で惨めな思いをする。「カロメル葉による沈思は記録するに値しない」とまで言う。(J: 1825/12/27) 憂鬱な気分障害が胆汁症からくるのか、その治療薬のカロメル葉の副作用からくるのか判断しかねる場合もある。(L: 9-348)

歳をとるにつれて胆汁と「黒い犬」はスコットの精神を蝕んでいくように見える。例えば、1828 年の 3 月は特に憂鬱だ。3 月 9 日の日記はまるでスコットらしくない。去年と比べて希望も健康も財政状態もよくなっているというのに、書類の整理といういつもの仕事で「いいようもない神経不安状態だ (“inexpressible nervousness”)。……私は神経不安 (“nervous”) で胆汁症 (“bilious”) で、要するに不幸なのだ。——これは間違っている、とても」(J: 1828/3/9) と書き記している。その後も自分の精神の弱さを「この軟弱な意気消沈 (“this pusillanimous lowness of spirits”) とか「醜い弱さ (“vile weakness”)」といった言葉で揶揄する。⁶⁷ 女性化された胆汁性鬱はその約 10 日後にまさにヒステリーとなって発症する。「今朝は黒い犬にひどくやられた。あの忌々しい心臓の動悸……あのヒステリーの発作のせいで、不意に溜息と涙が何の不満のない生活に訪れる。白い紙にぼつりと落ちるインクの染みの

⁶⁶ J: 1827/9/19 も同様である。Cf. “...I feel bilious, and vapourish, I believe I must call it....loneliness, and the increasing inability to walk, come dark over me, these mulligrubs belong to the mind more than the body”.

⁶⁷ こうした気塞ぎを解消するのは、つまらない話題について話合うといったちょっとした「気晴らし」(diversions) である。それも女々しい（女性的な）行為に喩えられている。(“It is like knitting a stocking” [ibid.]

ように何の意味ももたらさない」。(J: 1828/3/18) ここにきて急に涙もろくなったというのだろうか、7月にもヒポコンドリアの発作に見舞われる。「今日はひどく機嫌が悪い。リウマチの痛みもあるがそれにも増して忌々しいヒポコンドリアの発作のせいだ。頭は痛むし、胸は悲しみで苦しいし、目は涙であふれんばかりだ」。(J: 1828/7/2) 今ならさしずめ老年性鬱とも診断されかねない症状に晩年のスコットは陥るのである。

スコットのこのような病的ペルソナ——病気のすべてが胆汁症というわけではないが、主に胆汁的な自己に代表されるので、胆汁的ペルソナと言い換えてみてもよいもの——は、しかしながら、19世紀が進むにつれて忘却されていく。次にこの忘却の過程を検証してみよう。

健康で男らしいスコットの神格化と胆汁的ペルソナの忘却

忘却の過程の検証は比較的容易である。というか、自明過ぎて論証するまでもないかもしれない。というのも、19世紀ヴィクトリア時代においてスコットは男らしさと健康(剛健)、道徳の健全さと勤勉、規則正しい習慣とストイックなまでの自己抑制といったいわゆるヴィクトリア朝の価値観(Victorian values)の具現者として神格化されたからだ。⁶⁸ サミュエル・スマイルズの『自助』(1859)に度々スコットが勤勉さと忍耐力の顕著な例として言及されるのをはじめ、⁶⁹ 19世紀の批評家はスコットを健康と男らしさの具現としてこぞって賛美した。口火を切ったのは1820年のスコット評を書いたジョン・スコットだ。彼はスコットの小説がいかにも「健康によく効く特質」を備えているのかを褒めたたえ、彼の小説を読むと「健康と男らしさが我々の体を駆け巡る」と評した。⁷⁰ コナン・ドイルはスコットが男らし

⁶⁸ Ina Ferris, *The Achievement of Literary Authority: Gender, History, and the Waverley Novels* (Ithaca: Cornell University Press, 1991), 88-94; Ann Rigney, *The Afterlives of Walter Scott: Memory on the Move* (Oxford: Oxford University Press, 2012), 165-67, 278-79; Fiona Robertson, *Legitimate Histories: Scott, Gothic, and the Authorities of Fiction* (Oxford: Clarendon Press, 1994), ch.1.

⁶⁹ Samuel Smiles, *Self-Help*, ed. with an Introduction and Notes by Peter W. Sinnema (Oxford: Oxford World's Classics, 2002), 99-100, 115, 228-29, 252-53, 261, 265.

⁷⁰ John Scott, “Living Authors,” *London Magazine* 1 (Jan. 1820): 11-20, (12).

い男達を惹きつけるのは「彼自身が男の中の男 (“a manly man”）」だからだ
といい、⁷¹ かのカーライルは当時影響力を及ぼしたスコット評のなかで、健
康を説教するならスコットが教科書となろうといい、スコットを「勇敢で頑
強な男」、「身体の健康と精神の健全さをバランスよく備えた類まれな人間。
最も健康な人間の一人であろう」と絶賛した。⁷² 中世の騎士道精神をヴィクト
リア時代のジェントルマンシップに移植する役割を果たしたスコットは、⁷³
新しい男らしさ——筋肉的キリスト教に代表されるそれ——を志向するヴィ
クトリア人にとって模範の一人となったのだ。20 世紀になってからもその勢
いは衰えない。1917 年の『月刊科学』には優生学のエッセイとともにスコッ
トを言祝ぐジェイムズ・ロジャーズ博士の記事（「最も健康な男」）がカー
ライルのスコット評をパクるかのように載っている。⁷⁴ このような健康で男ら
しいスコット礼賛の風潮の中、⁷⁵ 病弱のペルソナ（胆汁的ペルソナ）はなかつ
たものとして忘れ去られていくのも不思議ではない。QED

『日誌』の告白と検閲

しかし、これではあまりに明快過ぎて面白くない。忘れてならないのは、
上記のスコット像の構築にはスコット本人が部分的に貢献しているものの、
晩年のスコットはそうした像とは異なるより複雑な自己像を『日誌』におい
て铸なおそうとしたことだ。『日誌』という性質上、プライベートなものだけ

⁷¹ Arthur Conan Doyle, *Through the Magic Door* (London, 1907), ch.2

⁷² Thomas Carlyle, “Sir Walter Scott,” in *Critical and Miscellaneous Essays*, vol.6 (London, 1888), 35. 但し注意しなければならないのは、これはカーライルの結論ではなく、カーライルはもう一方で、スコットを霊的な面では未熟であり、その過剰なまでの生産性は機械工場に喩えられ、あまりにも世俗的であるスコットの文学はトルコ風呂に浸かっているぬるま湯のようだと言っている。だが、この批評はヴィクトリア時代にはほぼ忘れ去られる。

⁷³ 松井、148 頁。

⁷⁴ Dr. James Frederick Rogers, “The Healthiest of Men,” *Scientific Monthly* 5, 1 (1917): 50-56.

⁷⁵ その他以下も見よ。Walter Bagehot, “The Waverley Novels” (1858), in *Literary Studies*, vol.2 (London, 1879); John Dennis, “A Talk about Sir Walter Scott,” *Good Words* (Nov., 1890): 756-63; Harriet Martineau, “Characteristics of the Genius of Scott,” *Tait’s Edinburgh Magazine* 2, 9 (1832): 301-14; Leslie Stephen, “Some Words about Sir Walter Scott,” *Cornhill Magazine* 24 (1871): 278-93.

ら世間の目に触れず、従って読まれないものとして書かれていると思ってはならない。スコット研究が一致して主張するように、スコットはこの『日誌』を読まれるもの——恐らく死後出版されるもの——と想定して書いている。とすれば『日誌』は生前に既に始まっている健康なスコットの神格化現象⁷⁶へ部分的に対抗するものとして書かれた可能性もあるのだ。それに、『日誌』は様々なペルソナを操るスコットにとって文学作品への付け足しや補遺ではなく、詩や歴史小説と同列にある文学作品と捉えなければならない。『日誌』はそうしたペルソナを試し鑄なおそうってつけの実験場といえるのだ。

案の定、『日誌』はスコットの死後、まずはロックハートの膨大なスコット伝の中で、直接引用という形で活用され、世紀末にはデイヴィッド・ダグラスによって書籍化される。しかしここでもまた、健康なスコットというバイアスが検閲をかけ、胆汁的ペルソナを脇に追いやる。19世紀版『日誌』とアンダーソンが編集した20世紀版『日誌』を比べてみると（すべての異動を確認したわけではないが）、19世紀版は病的ペルソナを削除する傾向が強いと言わざるを得ない。例えば1826年8月9日の最後の文面、暑さのなか冷えたワインとジンジャ・ビールを飲んだせいでコレラ病（“*Cholera Morbus*”）——コレラ菌によるものではなく、腐った過剰な胆汁を排出するために起きる下痢を伴う腹痛——にかかった記述が省略されていたり（J: 1826/8/9）、同じくコレラ病で『日誌』が「胆汁と痔（“*biles and piles*”）と軟膏だらけ」（J: 1826/12/28）になるのがうんざりだという記述のところでなぜか「痔」だけが削られていたり（ちなみに、これはスコット流のおどけた洒落であって痔が削られるとその洒落もきかなくなる）、胆汁で胃がむかむかするという記述もいくつかの箇所でも削除されている。⁷⁷胆汁的ペルソナをできるだけ隠そうという付度が働いているとしか言いようがない。

ところがスコット自身、この『日誌』を書くにあたって相当の覚悟を決めて臨んだ節がある。というのも、最初の方でスコットはルソーの「告白」に近いものを吐露しているからだ。ある時、妻よりも自分が先に逝くことを願うこう記す。

⁷⁶ 1820年のジョン・スコットの評論がその端緒である。

⁷⁷ J: 1827/7/11, 1827/7/12, 1827/9/10, 1827/10/9 など。

Indeed if this troublesome complaint goes on—it bodes no long existence—My brother was affected with the same weakness which before he was fifty brought on mortal symptoms. The poor Major had been rather a free liver. But my father, the most abstemious of men save when the duties of hospitality required him to be very moderately free with his bottle and that was very seldom, had the same weakness [of the powers of retention] which now annoy me and he I think was not above seventy when cut off. (J: 1825/12/7)

(抄訳: 実のところこの厄介な病気が続けばそう長くは生きられまい。兄も同じような病気もちで 50 前に症状が現れた。兄は放蕩ものだったが、節制に節制を怠らなかつた父でさえ今私を悩ます病気を患い、70 にならないうちに死んでしまった。)

この記述の少し前 11 月 22 日の日誌に最近ウィスキーの量を減らしたのは、節制家の父の健康を蝕んだ家系の病である「糖尿病」(“diabetes”)を気にしたのであると記しているのので (J: 1825/11/22)、件の引用の「病」とは糖尿病——当時理解されていた意味でのそれ——を指しているものと思われる。⁷⁸ それだけなら歳と共に衰え行く健康状態のことを述べているだけであって、それほど衝撃的な告白ではない。問題なのは、19 世紀版では削られた鍵括弧のなかの文言である。スコットは身体を悩ましている「病」(“complaint”)を「弱さ」(“weakness”)という言葉で言い換え、更に具体的な症状として「保持する力の衰え」と言明している。「保持する力の衰え」(“the same weakness of the powers of retention”)とは健康を維持する力がなくなったということではない。そうではなく、尿を維持する力が弱くなったということおもらしを意味している。分かりやすく言えば、「失禁気味」だということだ。「保持」(retention)という語がこうした文脈で医学用語としてよく使われることに加え、先の糖尿病の当時の定義が「頻繁な過剰な尿の放出」、若

⁷⁸ 急いで注釈しなければならないが、引用の「少佐」とはスコットの子、ジョン・スコット少佐である。彼も胆汁の病を患っていたことを考えると「糖尿病」と胆汁の病は生活習慣からくる慢性病として重なる部分がある。

い頃の飲み過ぎがたたり加齢と共に現れる疾患であること、医学的には混合されてはならないものとして（ということは一般的には混同され得るものとして）「失禁」が挙げられていることから、⁷⁹ 件の引用でスコットがさらりと告白しているのは年老いた体が失禁気味であるということなのだ。⁸⁰

これはヴィクトリア時代の人々にとって、とてつもなく受け入れがたい。胆汁症や不眠で頭が痛いとか胃が痛いということであればまだ受け入れる余地はあろう。（痛みに耐えるストイックな像を反転的に描ける）。しかし、コレラ病で下痢になって痔だらけだとか、糖尿の気があって失禁気味だということになると話が違う。上品さというブルジョワ・コードに触れるだけではなく、ラブレー流の奔放な開放的身体の対極にあるブルジョワジーの閉じた身体性——節制と自制によってコントロールされ男らしさと頑強さの基盤となるもの——を著しく侵犯することになるからだ。⁸¹ 男らしく引き締まった健全な身体を有していると目されるスコットの身体が実は歳と共に緩み、おもしろ気味であるとは決して認めることはできないだろう。⁸² しかし、スコット自身はこのような（ヴィクトリア時代の人々の神経を逆なでするかのような）病的ペルソナを最後の最後に読者に差し出そうとしていたのだ。

男らしい天才の誕生と胆汁的ペルソナの消滅

少々遠回りになったが、最後に、胆汁的ペルソナの消滅を天才論——より詳しくは天才の病気論——の観点からもう一度検証してみる。天才論を参照

⁷⁹ 例えば、William Buchan, *Domestic Medicine*, 8th ed. (London, 1784), 353-56. バカンの『家庭の医学』はスコットの蔵書の中にも含まれている。その他以下も見よ。Thomas John Graham, *Modern Domestic Medicine*, 2nd ed. (London, 1827), s.v. “diabetes,” 271；直接の原因は消化器官の不調であって、胃がその座であるという説も紹介されている。

⁸⁰ 少なくとも『日誌』1972年版の編者 Anderson はそう理解している。彼の索引、「健康」の項目の「失禁」(incontinence)を見よ。

⁸¹ 同じ放出でも、「荒療治」(heroic remedy)である瀉血による放出は文字通り英雄的であり男らしいのもので（勢いよく血が飛ぶさまは射精にも比される）、検閲の対象とはならない。ふらふらになるまで瀉血を好んで行ったスコットは、マルキ・ド・サド描く放蕩貴族に似ていなくもない。

⁸² 但し、スコットもあまりにも大胆過ぎたと思ったのだろうか、この件に関してはその後の記述はない。その後の病的な面は胆汁的ペルソナに限定されていく。

することで、スコットの胆汁的自己が消滅した経緯がより詳しく解明できるからだ。特にここでは文人の病跡論の嚆矢となったリチャード・マッデンの天才論を取り上げる。⁸³

当時のスコット評において、スコットはバイロンと対比されることが多かった。対比軸はまたしても健康と病である。健康で健全な天才の代名詞とされるスコットは、その人気の高さから、病的で不健全な天才の代名詞であるバイロンの絶大な影響力を抑え込む唯一の対抗軸となったのだ。⁸⁴ 例えば、『エジンバラ・レビュー』に掲載されたリスターのスコット評を見てみよう。⁸⁵ スコットはバイロンとしばしば比較され、どちらの天才が優位にあるかが問題とされるとしつつ、二人を次のように対比させる。スコットはバイロンのように「病的興奮の支配下」にはいないし、「自己中心的」でもない。スコットは「想像力の奴隷」ではなく「支配者」である。「悪魔にとりつかれた熱狂的な巫女」のように「うわごと」を繰り出すバイロンとは違って、スコットの作品は「静謐な力の感覚」を見せつける。そこには「熱にうなされた病的状態」のかけらもない。⁸⁶ というように、スコットの健全な天才性の論証はバイロンの病的天才性を否定する形で展開される。フェリスが主張するようにバイロンが具現するもの——過度に洗練され商業化された女々しい近代文学空間——からの解放をスコットの男らしい歴史ロマンスがもたらしてくれるのだ。⁸⁷

バイロンの病的天才性を裏付ける具体的な疾病（病理）は足の障害と胃腸の障害（胆汁症）となるだろう。実は、この二人は病という点では相違点よりも共通点が多いのだ。どちらも、幼い頃から足の不自由さを抱えて暮らしていたし、度合いこそ異なれ胆汁の病（胃弱）に悩まされていたからだ。しかし、バイロンにおいて胆汁的ペルソナ（自我）は病的・悪魔的といえども、

⁸³ Richard Robert Madden, *The Infirmities of Genius*, 2 vols (Philadelphia [London], 1833).

⁸⁴ Ferris, 242-46.

⁸⁵ T.H. Lister, "Waverley Novels," *Edinburgh Review* 55 (1832): 61-79.

⁸⁶ *Ibid.*, 73-74.

⁸⁷ Ferris, 88-91.

バイロンの文学を特徴付ける符牒となったのに対して、⁸⁸ スコットの方はスコットの文学性・天才性を反故するものとして消滅してしまった。それは何故か。天才とその具体的な病がその鍵となる。カーライルはバイロニズムやウェルテル主義を「病みに病んだ時代」の文学の象徴とし、それらを「鼓腸が生んだもの」であるとした。⁸⁹ カーライルはここで病的天才性と病的胃の弱さをうまく結びつけているが、そのテンプレートを作ったのは間違いなくマッデンである。

スコットの死から一年後に出版されたマッデンの『天才の病気論』(1833)は、伝統的な「文人の病」(the disease of the learned)を新しい医学的知見によってアップデートし、当時流行の「胃弱」(dyspepsia)や「胆汁症」といったファッションナブルな病に読みかえたうえで、それをポーブからバイロンにいたる天才文人の病歴に遡及的に適用しようとするものである。胃弱の歴史という観点からも非常に面白い文献だ。マッデンによれば、文人はその職業の性質上、胃弱になりがちである。(胃弱とはこの場合、ヒポコンドリアの亜種である心身症のことを指す)。当時の胃弱の医学的言説をなぞるかのようこう主張を展開する。脳を過剰に使う文人は、消化活動に必要な「神経エネルギー」を消耗させることで、胃弱からくる様々な病に徐々に徐々に体を蝕まれていく。その効果は表面上目に見えないため見過ごされてしまい、何年にも渡って影響を及ぼすささいな病はついには大病となって表出し文人生命を奪う。⁹⁰ 文人の生活習慣は健康に悪い。特に長時間にわたる座業の生活は心身の健康を損ねる。「文人が最も頻繁にかかる病は胃弱とヒポコンドリアである。極端な場合、これらの病は脳の病気、躁病か癲癇か麻痺で終わる。」⁹¹

マッデンは過去の天才文人の伝記からその病歴を辿り、強引にもそれを胃弱に関連付ける。彼らは知らず知らずのうちに胃弱にかかっていたのだ。例えばポーブは、どの伝記にも彼が胃弱であったとは書かれていないが、本人も気がつかないうちに胃弱になっていたに違いない。というのも、胃弱は他

⁸⁸ George Eliot, *Felix Holt* (London, 1878), vol.2, 34, “the Byronic-bilious style”.

⁸⁹ Carlyle, 37.

⁹⁰ Madden, vol.1, esp., ch.1, “The Effects of Literary Habits.”

⁹¹ *Ibid.*, vol.1, 130-31.

のあらゆる病を模倣・擬態するからだ。ここで鍵となるのはポーブの持病の「頭痛」である。頭痛や眩暈は胃弱の予兆となる顕著な症状なのに、ポーブはそれを胃に由来するものではなく独立した（固有の）病とみなしていた。これはよくある間違いだ。なぜなら、胃と頭（脳）は共感する神経で密接につながっているので、特に文人の場合はどちらが疾患の本来的な座なのか判断し難いからだ。マッデンはこのように当時の胃弱の専門医（例えばジェイムズ・ジョンソン博士）らの文献を援用しながら、ポーブは知らず知らずのうちに文人の病たる胃弱にかかっていたのだと結論付ける。⁹² ジョンソン博士、バーンズ、クーパー、バイロンらにも同様の手続きがとられる。彼らはみな不健康な文人であるがゆえに病的な天才の病たる胃弱に蝕まれたのだ。

マッデンが最後に取りあげる文人がスコットである。但しスコットだけはこれまでの天才文人と一線を画する。マッデンは不健康な文人たちの反証として、その例外的な存在としてスコットを提示するのだ。マッデンによれば、スコットのみが天才のなかで「文人の病」を免れている。それは、驚異的な量の文学作品を生産するのに十分健康で規則正しい生活を送っていたせいもあるが、それに加えて生来が、堅固な精神に見合った頑強な体を与えられていたからであり、疲弊することなく過酷な頭脳労働を果たすことができたからである。⁹³ マッデンのスコットは 19 世紀のスコット評を反復するかのように、バイロンに代表される病的な天才の反例として提示される。病的な天才詩人は脳の過剰な活動のため熱にうなされ、詩を書いている最中に発作を起こす。彼らは「病的な感受性」（“morbid sensibility”）の虜であるが、疲れ知らずのスコットだけはこのような感受性から免れている。⁹⁴ 彼には「上位の天才がもつ力強さ（“the vigour of the higher order of genius”）」が備わっているからだ。⁹⁵ ここでマッデンは、胃弱（ひいては胆汁症）を 18 世紀的なファッションブルな神経の病的延長線上にある病的な神経と感受性に結びつけることによって、また、ポーブからバイロンに至る過去の天才文人を

⁹² Ibid., vol.1, 133-45.

⁹³ Ibid., vol.2, 140-49.

⁹⁴ Ibid., vol.2, 147.

⁹⁵ Ibid., vol.2, 149.

胃弱と強引に結びつけることによって、彼らを天才ではあるが病的な、つまり本物ではない天才、過去の遺物に等しい天才とみなそうとしている。反対に、スコットの中にこれまでにはなかった、新しい天才像の予兆を見る。病んだ感受性ゆえにロマンティックに苦悩する、見るからに不健康で胃弱な天才文人ではなく、頑強な精神と身体を備えた、どんなものでも消化し飲み込んでしまう丈夫な胃をもった「上位の天才」。そうした新しい天才の姿をスコットに投影したのである。

ここまでくれば、新しい天才の登場と共になぜ胆汁的ペルソナが消滅しなければならないかが分かるだろう。新しい天才は男らしく健康で丈夫な体(=胃)を持っていなければならない。病んだ胃(=胃弱)は、共感する神経を伝って脳(精神)へと病んだ感性をもたらす。古い伝統的な天才文人らの病的な感受性と胃弱とは等価であり、新しい(ヴィクトリア時代を予兆するといってもいい)天才には胃弱は似つかわしくないのだ。健康で男らしい天才の神話を形成する端緒となった、ジョン・スコットのスコット評(1820)で、スコットの天才性が健全な消化活動に結びつけられているのは偶然ではない。「スコットの精神の驚嘆すべき特徴は、あらゆる食物を健康な乳糜(“*healthy chyle*”)へと消化することにある」。⁹⁶ 恐らくジョン・スコットはここで、身体健康は健全な乳糜がいかにつくられるかにかかっている、そして、その形成に深く関わるのが胆汁であるというアバネシーの胆汁説を想起している。彼をはじめ19世紀のスコット批評家がスコットの胆汁的ペルソナを受けられないと同様に、マッデンも胃弱のスコットは受け入れがたい。マッデンはロックハートらのスコット伝で明示される胃痛で苦しむスコットやカロメル薬で治癒するスコットの姿をなかったものとして葬り去る。マッデンがいかに目の前にあるはずのものを簡単に見過ごすことができたかは、スコットを論じる同じ頁上で、スコットの胃痛を救った水銀療法を嘲弄していることから分かる。いわく、流行の薬に飛びつくのが好きなファッションブルな患者は、頭が痛かろうが胃が痛かろうが肝臓が悪かろうが、アバネシーの「本」を読んで「青赤丸薬」を試さずにはいられない。その効果は一時的な

⁹⁶ John Scott, 12.

ものに過ぎず、飲んでも飲まなくとも同じ、というか胃弱患者にとっては有害無益な薬でしかないというのに。⁹⁷ マッデンのスコットは新しいストイックな天才の誕生を具現している以上、そこらの胃弱患者のように水銀療法に飛びつくようなものであってはならない。言うまでもなく、このような言説空間に胆汁的ペルソナが入り込む余地はない。『書簡』で自己成型され『日誌』で練り上げられたスコットの胆汁的ペルソナは完全に黙殺されるのである。

⁹⁷ Madden, vol.2, 157-59. アバネシーとは言っていないが、当時の文脈において“the book”とはアバネシーの「本」のことを指す。